

**[D年] 聖霊降臨節第19主日(2020年10月4日)**

**【旧約聖書日課】 箴言 3章13～20節**

- 13 いかに幸いなことか  
知恵に到達した人、英知を獲得した人は。
- 14 知恵によって得るものは  
銀によって得るものにまさり  
彼女によって収穫するものは金にまさる。
- 15 真珠よりも貴く  
どのような財宝も比べることはできない。
- 16 右の手には長寿を  
左の手には富と名誉を持っている。
- 17 彼女の道は喜ばしく  
平和のうちにたどって行くことができる。
- 18 彼女をとらえる人には、命の木となり  
保つ人は幸いを得る。
- 19 主の知恵によって地の基は据えられ  
主の英知によって天は設けられた。
- 20 主の知識によって深淵は分かたれ  
雲は滴って露を置く。

**【使徒書日課】**

**ローマの信徒への手紙 11章33～36節**

- 33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。
- 34 「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。  
だれが主の相談相手であったらうか。
- 35 だれがまず主に与えて、  
その報いを受けるであらうか。」
- 36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

**【福音書日課】**

**ヨハネによる福音書 10章31～42節**

- 31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒涇したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。36それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒涇している』と言うのか。37もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」39そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。
- 40 イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行って、そこに滞在された。41多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42そこでは、多くの人がイエスを信じた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 箴言 3章13～20節

- 13 幸いな者とは知恵を見いだした人  
英知にあずかった人。
- 14 そのもうけは銀による利得にまさり  
その収穫は金にまさる。
- 15 知恵は真珠よりも貴く  
どのような財宝もこれに並びえない。
- 16 知恵の右の手には長寿  
左の手には富と誉れがある。
- 17 知恵の道は友愛の道  
その旅路はいずれも平安。
- 18 知恵は、それをつかむ人にとって命の木。  
知恵を保つ人は幸いである。
- 19 主は知恵によって地の基は据え  
英知によって天を定められた。
- 20 主の知識によって深淵は分かたれ  
雲は露を滴らせる。

## ローマの信徒への手紙 11章33～36節

- 33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか。
- 34 「誰が主の思いを知っていたであろうか。  
誰が主の助言者となっただろうか。
- 35 誰がまず主に与えて、  
その報いを受けるであろうか。」
- 36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

## ヨハネによる福音書 10章31～42節

31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32 イエスは言われた。「私は、父から出た多くの善い業をあなたがたに示してきた。そのどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34 イエスは言われた。「あなたがたの律法に、『私は言った。あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。35 神の言葉を託された人たちが、『神々』と言われ、そして、聖書が廢れることがないならば、36 父が聖なる者とし、世にお遣わしになった私が、『私は神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。37 もし、私が父の業を行っていないのであれば、私を信じなくてもよい。38 しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父が私の内におられ、私が父の内にいることを、あなたがたは知り、また悟るだろう。」39 そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

40 イエスは、再びヨルダンの向こう岸、ヨハネが初めに洗礼を授けていた所に行き、そこに滞在された。41 多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42 そこでは、多くの人がイエスを信じた。

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・10月4日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「神の富と知恵」。使徒書日課の聖句から取られた主題であるが、旧約日課には「知恵文学」に分類される「箴言」が選ばれている。

・聖書における「知恵」の原語と用例については、資料「聖書と祈りの会 200819」を参照。

・「富」は、いわゆる「財産」に関することとして用いられる語の訳語であるが、観念的に「豊かさ」を示す語の訳語としても出てくる。「財産」の問題は、新約聖書が比較的厳しい態度を取り、「天に蓄える富」としての真の「豊かさ」を見いだす方向に論点に移る傾向にあるのに対して、旧約聖書では、必ずしも「財産」の所有にネガティブな見方はされない。元来、新約でも旧約でも、「財産」は神から恵みとして与えられるものとして理解されており、旧約が肯定的に受けとめるのは、「恵みのしるし」としての「財産」を得た者が「感謝」をもって神への信頼を深めることにつながるという素朴な見方を原則としているからである。もちろん、現実には「財産」の搾取や偏在が起こるが、「律法」はそのような不均衡に対する調整制度（一種の社会福祉制度）を実践することを求めている。もっとも、それが機能していない時代の社会にあって、預言者らが不正を糾弾し社会正義の実現を権力者や富裕層に対して訴える根拠として、「律法」における社会制度的規定が集成されていったとも考えられる。一方、新約において「財産」が否定的な見方をされるのは、必ずしも「清貧」を至上とする思想によるものではなく、むしろ預言者的な社会正義の実現に向けた信仰的動機付けのためになされたものと理解する方が正しい。すなわち、現実の中では不均衡や格差の生ずる「財産」を徹底的に神の「恵み」として理解し、その「神の恵みの行為」に倣う「愛の律法」に基づいて自発的に再配分のために提供するところに、信仰者としてのアイデンティティを見いだそうとしているのである。そのような信仰者の自己理解を徹底するとき、パウロが述べるような「賜物論」に基づく対等な関係に根差した「共同体形成」が可能になるのである。

・10月第一日曜日は、教団行事暦で「世界聖餐日・世界宣教の日」。「世界聖餐日」は、20世紀に入ってからのエキュメニカル運動（教会一致運動）の流れの中で、教派の垣根を越えて「聖餐」を共に祝うことができずにいた諸教会が「聖餐」を共に祝う交わりとなることを目標にかかげて1930年代の米国長老教会で記念されるようになり、第二次世界大戦後の1946年には世界教会協議会（WCC）の前身組織「世界基督教連合会」が世界中の所属教会に呼びかけることで広く記念されるようになった。日本基督教団も、同年、教団統理の通達という形で全教会に呼びかけられ、以来、教団行事暦として記念されてきている。

**旧約日課(箴言 3章より)**

・「箴言」は、旧約正典中「諸書」に含まれる「格言集」で、「ヨブ記」「コヘレトの言葉」などと共に「知恵文学」と呼ばれる文学様式を持つ。そこで扱われる「知恵」には、二つの異なる視座があり、一つは人の経験則に基づく人生訓的な「知恵」で、比較的安定した社会において人生経験の長者ほど熟知していると期待され、年長者から年少者へ、親から子へと継承される類の「知恵」である。もう一つは人の経験則だけでは計り知れない天的な「知恵」で、神だけがその全体像を把握しているものであるから、人はただ信仰をもって神から授かることでのみ知り得るようになるような「知恵」である。「箴言」は、前者の「知恵」としての格言を多く含むが、要所ごとに後者の「知恵」を告知することを通して、前者も究極的には後者に源泉を持つものとして提示している。その際、後者の「知恵」は、神に属するものとして擬人化され、神のもとから遣わされる「知恵」という表現が用いられる。このような「神の知恵」の擬人化は、新約・ヨハネ福音書における「神の言葉の受肉としてのイエス・キリスト」という理解に酷似しており、思想的な影響を受けているものと考えられる。

・日課箇所は、「知恵」の価値を論じ教える内容で、個別の教訓的な「知恵」というよりは、「知恵についての知恵」であり、「知恵論」と言ってもよい。13~18節は一般的な「知恵論」であり、19~20節は、神学的な「知恵論」となっている。

**使徒書日課(ローマ 11章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロの後期の書簡で、未訪問地であるローマの教会に宛てて、自分の訪問計画を告げ、さらに訪問後の新しい伝道計画を提示して派遣協力を求めるために、神学的根拠を示し信仰に基づいた協力を呼びかけている。殊に、新伝道計画がさらなる異邦人伝道の計画であることから、パウロは、「ユダヤ人・異邦人」という枠を出発点に置きながら、議論を展開している。

・日課箇所は、その議論の第二部（9~11章）で、第一部で異邦人の救いを示したことを踏まえて、今度は逆にユダヤ人（イスラエル）の救いのあり方をあらためて提示した最後に、祈り・讃美の言葉をもって議論を終結させている箇所。ここには表現されていないが、直前までで、パウロは、ユダヤ人も異邦人も皆、結局のところ同じように、神にひとたび反逆し離反するという過程を経て、そこからただ神の憐れみによって立ち帰らせられるのだという、究極の救済観を提示している。そのような救済計画を、パウロはここで、「神の富と知恵と知識」と呼び、「神の定め」「神の道」と表現している。

・パウロの神学思想は、しばしば「十字架と復活」に中心があるとされるが、むしろ、ここに示されるような「神中心主義」が確信の基盤にあることで「十字架と復活のキリスト」論を形成し得ているというべきである。

**福音書日課(ヨハネ 10 章より)**

・日課箇所は、前週に続く段落で、「神殿奉獻記念祭」の場面設定の中に置かれた主イエスとユダヤ人との論争シーンの後半(31~39 節)、および、主イエスが再び洗礼者ヨハネの活動していたところ(つまり 1 章で描かれていた場所)に行かれたときのことを伝える短い逸話(40~42 節)。

・最初の論争シーンでは、これまでにユダヤ人たちに對してご自身が「父(である神)の子」であると主張してこられたことを踏まえて、非常に明確な「御子」論を提示している。共観福音書で描かれる主イエスは、ご自身が「神の子」であるという明示的な主張をほとんどされず、それは示唆され、また悪霊や異邦人によって「告白」されるにすぎないが、ヨハネ福音書では、主イエスご自身が「父の子」であること、また「父と子是一つ」であることを繰り返し強調して語られたものとして描かれている。ヨハネ福音書は、日課箇所、その主イエスの主張に明確な聖書的神学的根拠があることを提示しているのである。

・「御子(神の子)」論は、34~38 節で提示されている。ここで、「神の子」は、本質的実体的に「神」と同質同一であるというような意味ではなく、「神の言葉を受けた人」のことである。「神の言葉」を託された者は「神(父)」から「世に遣わされた」者として「神の子」であり、その者は託された「神の言葉」を語り、またそれに基づいて「神(父)の業を行う」者であるから、「神」を信じる者は必ずその「神の子」を信じることになる。ここにあるのは、本福音書が冒頭で宣言しているような「神の言葉」に対する究極的な信頼であり、それを「神」ご自身の「言葉」として完全に受け入れるところに、「神の子」の存在基盤が置かれるというのである。その意味では、共観福音書の描く主イエスが「律法と預言者」と呼ぶ聖書を「神の言葉」としてどこまでも信頼し、そこに徹底的に聞き続けた方であったことと、基本的に一致する。ヨハネ福音書は、それによって主イエスが「神の子」としての自己理解を得られていたことを明示することで、その主イエスに導かれ、その歩みの中に留まる弟子たちも同じ自己理解へと到達しうることを示唆しており(17 章参照)、共観福音書に比して「キリスト論」よりも「弟子論」を指向していることがわかる。

**来週の誕生日 (10 月 4 日~10 日)**

**主日礼拝の讃美歌から**

・21-28 番「み栄えあれや」は、伝統的な典礼で詩編や讃歌(聖書の句に基づく歌)に続いて唱えられた頌栄(栄唱)で、ラテン語「グロリア・パトリ」で知られる。これに、ドイツ生まれで 19 世紀米国の聖公会でオルガニストを務めたチャールズ・マイネケが曲を付けて教会音楽集の中に収めた。メソジスト教会の讃美歌集にも収められ、広く歌われてきた。

・こどもさんびか・120 番「しゅイエスのみちを」は、  
 ・21-18 番「心を高くあげよ！」(= II 1)は、コロサイ 3:1~4 に基づく伝統的な聖餐祈祷冒頭の「スルスム・コルダ SURSUM CORDA」(「心を高く上げなさい」との呼びかけに對して、「わたしたちは心を高く上げます」と応答)に基づく讃美。作詞者バトラーは 19 世紀英国教会の司祭で、自分が校長として勤める学校の讃美歌集のために作詞。作曲者スミスは 20 世紀米国聖公会の司祭。  
 ・21-81 番「主の食卓を囲み(マラナ・タ)」は、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏(ツグトシ)が、I コリ 16:22 の「マラナ・タ(主よ、来てください)」等に基づき、主の祈りの中心主題を黙想する中で 10 年かけて作詞作曲。新垣は第二ヴァチカン公会議後の典礼改革の中で進められた母国語聖歌創作をリードしてきた一人で、多くの聖歌・讃美歌が教派を越えて歌われている。

**21-28「み栄えあれや」**

**GLORIA PATRI**

Gloria Patri, et Filio, et Spiritui Sancto. / Sicut erat in principio, et nunc, et semper, / et in saecula saeculorum. / Amen.

**(カトリック「栄唱」)**

栄光は父と子と聖霊に。初めのように今もいつも世々に。アーメン。

**(聖公会「小栄唱」)**

栄光は 父と子と聖霊に、初めのように、今も 世々に限りなく。アーメン

**21-18「心を高くあげよ！」**

**Lift Up Your Hearts! We Lift them, Lord, to Thee**

1. 'Lift up your hearts!' We lift them, Lord, to thee;  
 here at thy feet none other may we see:  
 'lift up your hearts!' E'en so, with one accord,  
 we lift them up, we lift them to the Lord.
2. Above the level of the former years,  
 the mire of sin, the slough of guilty fears,  
 the mist of doubt, the blight of love's decay,  
 O Lord of light, lift all our hearts to-day.
3. Above the swamps of subterfuge and shame,  
 the deeds, the thoughts, that honour may not name,  
 the halting tongue that dares not tell the whole,  
 O Lord of truth, lift every Christian soul.
4. Lift every gift that thou thyself hast given:  
 low lies the best till lifted up to heaven;  
 low lie the bounding heart, the teeming brain,  
 till, sent from God, they mount to God again.
5. Then, as the trumpet-call in after years,  
 'Lift up your hearts!' rings pealing in our ears,  
 still shall those hearts respond with full accord,  
 'We lift them up, we lift them to the Lord!'